
教育上の目的に応じ
学生が修得すべき
知識及び能力に関する情報

2024年版

洗足学園音楽大学

コース

作曲コース

Ⅰ コースの 到達目標

21世紀は作曲の手法、様式が多様化しましたが、本コースでは『楽譜を作成して音楽を伝え、残すこと』をもっとも重んじています。このような西洋音楽を中心に発展してきた作曲を志す者は、自分の内なる想いを楽譜にあらわすための様々なテクニックを身に付けなければなりません。

和声法や対位法など、19世紀頃までの作曲技法はもとより、20世紀以降の作曲技法まで、幅広い書法の修得により創造性を高めることが必要です。

実技レッスンや専門選択科目を通じて多くの音楽語法を身に付けるとともに、さまざまな編成による作曲・編曲を通じ、楽譜に関わるプロフェッショナルとしてあらゆる音楽シーンで活躍できる作編曲家となることが到達目標です。

Ⅱ コースが推薦する 基礎科目名

- ①「浄書と音源の制作」
- ②「歌曲作曲研究Ⅰ～Ⅱ」および「合唱曲作曲研究」
- ③「管弦楽概論」および「管弦楽法」
- ④「20世紀の和声法研究」および「20世紀の奏法研究」
- ⑤「20世紀の作曲技法Ⅰ・Ⅱ」
- ⑥「音楽実技実習」
- ⑦「ソルフェージュⅠ～Ⅳ」および「ソルフェージュ研究Ⅰ～Ⅱ」

その他の専門選択科目も履修することが望ましい。

Ⅲ Ⅱの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

①「浄書と音源の制作」により、楽譜の書き方を専門的に学び、手書きにおいても、コンピュータ浄書においても正しく記譜できる力を養成します。

②「歌曲作曲研究Ⅰ～Ⅱ」および「合唱曲作曲研究」において、声楽や合唱の様式を専門的に学ぶことができます。

③「管弦楽概論」および「管弦楽法」により、オーケストラで用いられる楽器についての知識を得ることができ、実際に管弦楽や吹奏楽を書く力を修得します。

④「20世紀の和声法研究」および「20世紀の奏法研究」、そして⑤「20世紀の作曲技法Ⅰ・Ⅱ」において、古典的な技法にとどまらず、近現代の書法を体得することで、自らの音楽が独自性をもつきっかけを得ることができます。

作曲家にとってピアノ演奏など器楽に精通する必要があるため、⑥「音楽実技実習」において楽器の演奏と深く接することが大切です。

以上のすべての学修にあたって、その基礎となる力を育成するための⑦「ソルフェージュ」の学修は不可欠です。

コース

音楽・音響デザインコース

I

コースの 到達目標

本コースでは、現代の音楽制作に関する分野を学びます。主に作曲家、録音、映像制作、プロデューサー、あるいはミュージック・クリエイターとして社会で活躍出来る人材を育成することを目標としています。その土台となるのはコンピューターリテラシーと和声やコードなどのハーモニーです。これらを修得することにより、音楽作りの基礎を固めることができます。その上で様々なジャンルの編曲やマニピュレーションを学ぶことにより、一連の音楽制作を完了します。また、映像のための音楽の作曲はその応用であり、より充実したカリキュラムを設定しています。一方、録音は学内における多くの「現場」を経験することにより、どのようなシチュエーションでも的確な音処理ができるようになるでしょう。

さらに、インタラクティブな音楽表現を目指したCycling74 MAXのプログラミングや、作品を社会へ発信するツールとして、WEBデザインや映像編集やCG、あるいはモーショキャプチャーやプロジェクションマッピングなど映像演出の技術も得ることが可能です。

このように、多岐に渡る学生のニーズに対応したカリキュラムを設定しています。本コースで学ぶ事が出来る貴重な4年間を有効に生かして、音楽制作に関わる知識や技術を可能な限り幅広く身に付けてください。

II

コースが推薦する 基礎科目名

- ①「ハーモニー1、2」
「ポピュラーミュージック・ハーモニー」
- ②「リズムセクション・ライティング」
「アドバンスト・アレンジテクニク」
- ③「DAW演習 I・II」「Pro Tools演習」
[音楽プログラミング入門][WEBデザイン実習]
- ④「サウンドエンジニアリング基礎理論」
「サウンドエンジニアリング応用理論」
- ⑤「ソルフェージュ I ～」
- ⑥「和声学、対位法」
- ⑦「管弦楽法」
- ⑧「指揮法」
- ⑨メディアコンテンツ制作実習

III

IIの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標と の 関連性について

本コースのカリキュラムのカテゴリーの中でも「ハーモニー理論」、「アレンジテクニク」、「デジタル・オーディオ・ワークステーション」、「エンジニアリング」の4部門に含まれる授業は特に重要です。

まず、「ハーモニー理論」系に含まれる「ハーモニー1、2」では、商業音楽における共通言語であるコードネームを基本としたハーモニーの基礎を学びます。これを学んだ上で、次の「ポピュラーミュージック・ハーモニー」において、ポップスの分野における様々なハーモニーの応用手法を身に付けます。ここまでは本人が志向する分野に係わらず、ミュージック・クリエイターとして必須のスキルとなる部分なので、このコースの全ての学生に履修して欲しいと考えます。この後に続く「アドバンスト・ハーモニー」や「コンテンポラリー・ハーモニー」については、映画音楽家を志望する学生には必須の内容です。ポップス系作曲家を志望する学生であっても洗練された音作りを目指す者にとって「アドバンスト・ハーモニー」は、高度なテクニクでありながら多くの役立つ知識が得られます。

次に「アレンジテクニク」系に含まれる「リズムセクション・ライティング」と「アドバンスト・アレンジテクニク」は、その名称通りの編曲における多様なテクニクを得るための講義で、作曲系の学生にとっては、とても魅力的な内容になっています。是非、履修して下さい。

「デジタル・オーディオ・ワークステーション」系に含まれる「DAW演習 I・II」、「Pro Tools演習」においては、コンピューターや音楽編集ソフトの取り扱いの基礎を学びますが、これも現代のミュージッククリエイターには欠かせない知識です。さらに可能であれば、表現の拡張のため「音楽プログラミング入門」や「コンピュータ音楽表現」「メディアコンテンツ制作実習」も履修すると良いでしょう。

「エンジニア」系に含まれる「サウンドエンジニアリング基礎理論」、「サウンドエンジニアリング応用理論」は、録音を志望する学生については必修と言える講義ですが、作曲系の学生についてもこれからの時代は、このような知識が自分の音作りのために非常に重要になってきます。また、映像制作やその演出を主体としている学生は⑨を推奨します。

その他⑤～⑧までに書いた科目は、作曲系の学生には特に履修を勧めます。その他の共通選択科目も含め音楽大学だからこそ得られる知識を貪欲に吸収して4年間を有意義に過ごしてください。

コース

ピアノコース

Ⅰ

コースの
到達目標

ピアノの演奏を行うために必要不可欠な技能を修得し、専門的な知識を身につける。
また音楽文化に関する広範な教養を得ると同時に、多様な価値観を持つ人々と興味、関心をともに分かち合い、見識を広め協調性を養う。
さらにピアノ演奏を通して自己を表現することに関心を持ち、文化や社会において積極的に活動する能力を高める。

Ⅱ

コースが推薦する
基礎科目名

- ①「二重奏Ⅰ・Ⅱ」および「室内楽研究」
- ②「歌曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」
- ③「器楽曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」
- ④「ピアノ指導法1・2」
- ⑤「和声学」
- ⑥「初見視奏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
- ⑦「音楽史」
 - (1)「西洋音楽史1」 (2)「西洋音楽史2」 (3)「西洋音楽史3」 (4)「西洋音楽史4」
- ⑧その他
 - (1)「ピアノ音楽鑑賞研究」 (2)音楽教室グレード対策講座Ⅰ・Ⅱ

Ⅲ

Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

①「二重奏Ⅰ・Ⅱ」および「室内楽研究」
アンサンブルの学習は独習の機会が多いピアノ学習者にとって重要です。他者とともに音楽的なそれぞれの役割を理解してテンポやバランスなど、協調して演奏を行うことはアンサンブルそれ自体の学習にとって重要であるばかりでなく、独奏の際にも役立たせることができます。特にピアノ以外の弦楽器や管楽器奏者と学習を行うことは、それぞれの楽器の特性や音色の違いなどの理解を深め、ピアノ奏法においても音楽性や多様な音色での演奏能力を身につけるために必要不可欠です。二重奏ではまずピアノ連弾作品から学習を行います。2台ピアノ等も含めピアノ同士での学習も有益で、これらアンサンブルの学習を通じて他者との協調性を養っていくこととなります。

②「歌曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」 ③「器楽曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」
歌のように、また踊りのように演奏したい、これはピアニストにとっての重要な目標として挙げられる項目です。フレージングの把握、レガートなどのアーティキュレーションの表現、テキストから読み取れる文学的かつ具体的な思考の具現などを通して想像力を豊かにすることはピアノ学習者の音楽性を養うための良い機会となります。さらに自分自身の音や歌い方を客観的に聞く習慣を育む事が出来る授業です。声楽や器楽奏者等他者の自己表現を通じての協調性や自らの自己表現等を学びます。

④「ピアノ指導法1・2」
ピアノ指導の方法を考察して実践することを通して、教育理念や現在に至るまでの各ピアノ指導法の研究を行うのがこの授業の目標です。幼児の身体、運動機能、心理発達などの基礎知識、教材研究、レッスン体験など、卒業後に指導する立場となり実際に生徒さんを指導する際に役立つための授業内容となっています。

コース

ピアノコース

——Ⅲ——
Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標
との
関連性について

⑤「和声学」

和声学の基礎である三和音をはじめとした長調・短調の和声学の理論と実施および分析を行うこの授業では学習の段階や能力に応じてきめ細かいクラス別の指導が行なわれます。ピアノの学習者にとって和声学で扱われる四声体を中心とした学習はピアノの作品中にみられる調性和声の和音の響きや非和音を含んだ旋律線などの声部の動きを日常的に演奏することに直結する内容が多く含まれます。この授業での学習とともに実施課題や分析課題などをピアノで演奏して復習を注意深く行うことは特に有益です。次の「初見視奏」の学習とともにピアノ演奏に必要な専門的な技能を身につけることにつながります。

⑥「初見視奏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」

ソルフェージュで学習する旋律等の読譜を発展させて、ピアノ作品の楽譜の読譜を通して、書かれている音楽の要素(テンポ、曲想、メロディー、和声、伴奏型など)をいち早く捉えてそれを実際にピアノで演奏する授業です。初見視奏そのものの上達はもちろんのこと、日頃のピアノ学習の際にどのように読譜を行い作品に対して効果的なアプローチをしていくかという点を学べるところが科目履修が有益である理由です。

⑦「音楽史」

音楽文化の歴史的な背景の学習は音楽研究に必要不可欠であり、また演奏の際にもそういった時代や地理的な特徴による様式をどのように活かすかが直接的・間接的に重要となります。ピアノ学習者が頻繁に取り扱うことの多いバロック後期から20世紀前半までの時代の音楽史の学習はもちろん念入りに行わなければなりません。それ以外の時代や地域の音楽の歴史についてもより多く捉えていくことがコースの到達目標で示された、音楽文化の広範な教養を身につけることにつながります。

⑧ その他

詳細は該当科目のシラバスを参考にしてください。

コース

管楽器コース

I

コースの
到達目標

管楽器コースでは、必修科目のレッスンから基本を学び、優れた演奏能力を身につけ、合奏授業等に於いて最も必要な協調性を養う事を、大切な目標に掲げます。

管楽器は単音でしか演奏出来ない楽器で、演奏家としてはソリストと言う場面もありますが、殆どの職業は合奏態の中に有ります。この現場で求められる事は「卓越した技術・音楽性」そして「協調性」なのです。また、吹奏楽指導者マスタークラスでは、吹奏楽指導法に加え、マーチングやポップスのスキルも学びます。教育者としての道を選ぶ者にとっても「優れた指導能力」と同時に学校という集団生活の中で、子供達とのコミュニケーションを図り、クラス全体の空気を読み取り、それらを良い方向に導く「協調性」を示す事が出来る能力が求められるのです。つまり、大学卒業後皆さんが活躍するであろう、あらゆる現場では「有能な技術」に加え「協調性」を兼ね備えた人材が求められているのです。これから皆さんは個々の演奏能力や音楽性、また指導能力を養うべく厳しい鍛錬の場に身を置くこととなりますが、学生生活の中に於いても職業の現場をシュミレートしながらの日々を送る事により、有能な新人として社会に羽ばたいて行ってくれる事を望んでいます。

II

コースが推薦する
基礎科目名

- ①「ソルフェージュ」
- ②「和声学」
- ③「音楽分析基礎講座」
- ④「西洋音楽史1」、「西洋音楽史2」、「西洋音楽史3」、「西洋音楽史4」
- ⑤「副科実技」(ピアノ)
- ⑥「吹奏楽指導法」 ※吹奏楽指導者マスタークラス
- ⑦「マーチングディレクター概論」 ※吹奏楽指導者マスタークラス

III

IIの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

- ①「ソルフェージュ」
音符への対応、基本的なリズム感、音程、フレーズ感等の能力を養う。
- ②「和声学」
楽譜を読む力、音符へのこだわり、調性、フレーズ感等の理解度を深める。
- ③「音楽分析基礎講座」
クラシック音楽の表現上のルールを知る。表現の理論的裏付けをする。
- ④「西洋音楽史1」、「西洋音楽史2」、「西洋音楽史3」、「西洋音楽史4」
取り組む音楽の歴史的な位置、その音楽が成り立ってきた過去・未来を感じ、表現に役立てる。
鑑賞の立場に立った時、人類の社会的変遷と文化・芸術のかかわりが理解でき、広い音楽観を持つことにつながる。
- ⑤「副科実技」(ピアノ)
和声感を身につける。
スコアリーディングに不可欠な能力を養う。
ピアノ曲で基本的な音楽形式を学び、自分の専門楽器に生かす。
- ⑥「吹奏楽指導法」 ※吹奏楽指導者マスタークラス
指揮法、合奏指導法、作編曲法を学び、指導者として必要なスキルを身につける。
- ⑦「マーチングディレクター概論」 ※吹奏楽指導者マスタークラス
在学中にマーチングバンド指導者ライセンス1級の取得を目指す。

コース

弦楽器コース

Ⅰ コースの 到達目標

弦楽器コースはヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ハープの専門コースがあり、実技指導を経験豊かな指導陣によりマンツーマンで受けることが出来ます。

A. 室内楽
演奏能力を共に高め合いながらより緻密なアンサンブルを勉強することが出来ます。

B 弦楽合奏
弦楽器の合奏に必要な能力を養うため、基礎力の養成に力を入れているストリングオーケストラの授業があります。クラシック曲はもちろん、本学園ならではの他コースとのコラボレーションをする機会もあり、年2回授業成果発表のコンサートを前田ホールにて行います。

C オーケストラ
交響曲や管弦楽曲などの音楽を国内外の一流指揮者や指導陣より学び、演奏会も豊富でオーケストラの仕組みを演奏を通して学んでいくことが出来ます。

国内外の演奏家や指導者による特別招聘レッスンも豊富です。クラシックのみならず様々な分野で活躍することが出来る音楽家を育てることを目標としています。

Ⅱ コースが推薦する 基礎科目名

- ①「ソルフェージュⅠ～」
- ②「西洋音楽史2」、「西洋音楽史3」、「西洋音楽史4」
- ③「和声学Ⅰ～」
- ④「音楽分析基礎講座」

Ⅲ Ⅱの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

①「ソルフェージュⅠ～」
楽譜を読む上での基本であるリズム、音程、フレーズなどの訓練のために不可欠です。

②「西洋音楽史2・西洋音楽史3・西洋音楽史4」
バッハに代表されるバロック時代から、モーツァルト、ベートーヴェンの古典派、そしてロマン派等、その時代の歴史的な背景またはその時代における音楽の役割を学ぶ事は器楽奏者にとって欠く事の出来ない重要な学問です。

③「和声学Ⅰ～」
音楽の根源的な理解の上で、大変重要な勉強のひとつに和声学があげられます。ことに弦楽器は、ほとんどが単旋律の楽器といってもよいものですから、調性の勉強のためにも和声学的考察は重要です。和声学の知識なしに楽曲の分析、解釈は不可能と言ってよいでしょう。

④「音楽分析基礎講座」
楽譜に提示されるあらゆる記号、約束事、また、和声学的解釈、音階等、読譜のための基本を学ぶ上で大変重要、かつ実際的な学問です。

コース

打楽器コース

Ⅰ

コースの
到達目標

本コースでは様々な演奏形態の音楽で各種打楽器の奏法、豊かな表現を追求し、プロの音楽家や教育者、また、音楽を学んだ中から派生して見つけた道で活躍する人材の育成を行うことを到達目標としています。

その目標のためにはまず音楽と自分の演奏楽器についての知識を広げるために

- ・「実技練習で、基礎から始まる実力の向上を目指すこと」
- ・「楽曲のアナリゼと楽譜の読譜能力を身につけること」
- ・「各種打楽器の背景や、音楽の歴史を学ぶこと」
- ・「楽器の構造を学習して基本的なメンテナンス方法の知識を知ること」
- ・「音楽を通して豊かな創造性を身につけること」

が大切です。

また、オーケストラ、吹奏楽、各種アンサンブルへの参加や他コースとのコラボレーションの積極的な実践を推奨しています。それらの経験の中で人とのつながりや音楽表現の幅と視野を広げることは、卒業後社会に出てから必要となる、様々な場に応じた対応を取る力の修得に繋がります。

※吹奏楽指導者マスタークラスでは、吹奏楽指導者に必要不可欠なスキルを身につけることを目標とします。

Ⅱ

コースが推薦する
基礎科目名

- ① ソルフェージュⅠ～
- ② 和声学Ⅰ～
- ③ 音楽分析基礎講座
- ④ 西洋音楽史1～4
- ⑤ 副科実技(ピアノ)
- ⑥ 「吹奏楽指導法」 ※吹奏楽指導者マスタークラス
- ⑦ 「マーチングディレクター概論」 ※吹奏楽指導者マスタークラス

Ⅲ

Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

①、②、③：オーケストラ等の中に組み込まれた打楽器パートを演奏する上ではもちろんのこと、打楽器だけの作品(ソロ、アンサンブル問わず)でも、楽譜を読むにあたり、単に音符の羅列をたどるだけではなく調性、音程、和音構成、フレーズなどを理解し、また、決められている基本的な約束事を知ることが大変重要です。

④：各時代の音楽史を学び、時代背景とそこでの音楽との関連、発展の歩みを知ることが作品へのより深い理解に繋がり、また、これからの時代の音楽のあり方、そこでの打楽器の位置づけなどを考察して行く手がかりとなります。

⑤：スコアリーディングを学ぶ。また、打楽器以外の楽器演奏の基礎を習得することは特に将来的に何らかの形で教育・指導に携わる人達には非常に有益です。

⑥：指揮法、合奏指導法、作編曲法を学び、指導者として必要なスキルを身につける。 ※吹奏楽指導者マスタークラス

⑦：在学中にマーチングバンド指導者ライセンス1級の取得を目指す。 ※吹奏楽指導者マスタークラス

コース

電子オルガンコース

I

コースの 到達目標

現代の音楽界に於いて、存在を浸透しつつある電子オルガンは、演奏・創作・教育とあらゆる面で魅力を持つ楽器である。楽器の持つ性格からも、クラシック・ポピュラーを初め、あらゆるジャンルの知識、理解が不可欠である。当コースでは、演奏家として、教育者として、いろいろな分野で活躍できるよう、経験豊富な活躍中の講師陣を揃えて、演奏・創作の両面からアプローチしている。それぞれの専門家より学ぶことで、技術のみならず、自分の楽器、そして音楽を、言葉や音楽で表現できるようになることを目指すものである。楽器の持つ多面性を利点として、幅広い音楽活動ができる人材を作ることを目標とする。

II

コースが推薦する 基礎科目名

- ①「電子オルガン・スタジオエレクトロニクス」
- ②「電子オルガン演奏法」
- ③「オーケストラ演習」
- ④「ポピュラー奏法研究」
- ⑤「創作演習」
- ⑥「編曲演習」

以上に加え、演奏グレードマスター講座等、専門選択科目については、履修することが望ましい。

III

IIの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

①「電子オルガン・スタジオエレクトロニクス」では、楽器のさまざまな機能を音楽的に有効活用する方法を学び、さらにはコンピュータとの接続から音作りまでを幅広く研究していく。本番を行う場合の音響設定なども学び、それを実際の現場で試し経験を積むことにより、演奏家、指導者などに生かすことができるようになる。

②「電子オルガン演奏法」では、テクニックを学ぶのはもちろんのこと、音楽の解釈や演奏表現にまで及ぶ。自身の演奏力アップのみならず、指導法も学ぶため、演奏家としての技術、指導者としてのノウハウも持つことができ、論じることができるようになる。

③「オーケストラ演習」は、指揮者のもとスコアリーダーイングによってクラシックの管弦楽曲やコンチェルトを合奏すること学び、演奏と共にクラシックの様式なども学び、演奏家としての経験並びに指導者としての指導法などを実践を通して学んでいく。

④ポピュラー奏法研究は、ギター、ドラムス、ベースとのセッションを通じてポピュラー音楽のさまざまなスタイルやリズム、更にアドリブなども学ぶ。セッションを通して、人とのコミュニケーションなども学び、音楽と共に成長していく。

⑤「創作演習」では、理論と実習を主眼とする実践的な講座になっている。電子オルガンによるオリジナル作品を完成させることから、個々のレパートリーを増やしていく。

⑥編曲演習では、電子オルガンの多様性を経験すべく、クラシック、ポピュラーそれぞれの教員が、“私の編曲法”という観点から、個性豊かな講義を行う。幅広くスタイルを学ぶことは、個々の音楽の広がりを実現するだけでなく、指導者になる場合にも大切なこととなる。以上の授業より、電子オルガンの魅力を十分に理解し、表現できる音楽家を育成する。

コース

ジャズ&アメリカンミュージックコース

—— I ——
コースの
到達目標

1 音楽は自己表現

人は、様々な方法で自分を表現します。生まれたばかりの赤ちゃんでさえ泣くことで自分を表現しています。さらに観察すると実は泣くだけではなく顔の表情や仕草でも自分を表現しているのにも気付くことでしょう。乳幼児でも様々な手段をつかって自分を表現しようとするのが人間ですから、成長するにつれてさらにその表現手段が広がっていくのは言うまでもありません。その人間の多種多様な自分の表現手段のひとつが芸術であり、その一つが音楽であり、そして、その音楽のなかの一つの表現手段がジャズというスタイルです。つまり、音楽は、たとえどのような性格の持ち主であれ、人が自分を表現したいという欲求の上に成り立っているのです。

2 ジャズについて

では、ジャズはどのような音楽なのでしょう？

「その場で感じたことを自由に表現することのできる音楽です」

その場で感じる表現は、アドリブというものであったり、譜面にとらわれずに自由に演奏できたり、また、アレンジによって曲を自由に变化させたり、さらには自分の表現が凝縮された自作曲を作ったりするというジャズの自由さがあることで可能になります。その意味では、ジャズは本来人間が生まれてから常に自分を表現しているのに非常に近い形で自己表現ができる音楽と言えるでしょう。

3 到達目標

ジャズは「自由な音楽」です。ですので、ジャズコースで学ぶ学生が「いわゆる」ジャズだけをやる必要はありません。一般に言われる、ポップスをやっていく人もいるかもしれません。ファンクやフュージョンその他多くのジャンルの音楽をやっている、「その場で感じたことを自由に自己表現しよう」という姿勢で音楽をすれば、それは全てジャズということになります。実際にジャズはそのようにして全てのスタイルの音楽に影響を与えてきました。

1)ジャンルにとらわれず感じたものをその瞬間に自由に表現できる能力を身につける、2)自己表現のための音楽的理解と知識を深める、これらを到達目標とします。

—— II ——
コースが推薦する
基礎科目名

イヤートレーニング
ハーモニー
ヴォイスिंगアンドオーケストレーション
アレンジング
ジャズコンポジション
アンサンブル／ラボ
ベーシックインプロビゼーション レパートリー

—— III ——
IIの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

自由に音楽で自分を表現するということは、ただ好き勝手に音楽をやることとは違います。自由に音楽をするためには表現する音楽の材料をいろいろな角度から知り、感じ、そして実際にそれを音で試す経験が必要です。

そのために必要な推薦科目:

1 音やハーモニーを聴くことのできる力

・イヤートレーニング

2 曲のハーモニーを味わいその響きがどのようなしくみで成り立っているかを理解する

・ハーモニー

3 曲を自分の個性で表現し、いろいろな楽器を用いる表現の技術を学ぶ

・ヴォイスिंगアンドオーケストレーション

・アレンジング

4 奏法研究やその他の授業の内容をふまえ、他の楽器と共に音楽をつくることを学ぶ

・アンサンブル／ラボ

5 様々な作曲法を学ぶ

・ジャズコンポジション

6 即興演奏の基礎と即興をする楽曲を学ぶ

・ベーシックインプロビゼーション ・レパートリー

I

コースの 到達目標

1. 演奏能力についての目標

基本奏法の習得、演奏技術の向上を目指した実習や合奏演習を通じて、音色にこだわった厳密な音程(音律)とリズム(間)に対する感覚を養い、演奏家としての必要不可欠な音楽的基礎能力を確実なものとする。合奏については邦楽アンサンブルのみならず、洋楽等、他ジャンルとのコラボレーション対応力を身につける。正確な読譜、楽曲分析、演奏解釈に基づき、古典から現代作品まで様々な様式の作品に取り組む。さらに既存の作品のみならず創作や即興演奏も試み、演奏家としての実力を養う。

2. 教育的能力についての目標

学校教育における邦楽器の活かし方や教育法を研究する。さらに未経験者、高齢者、障害者等を対象とした(想定した)邦楽器によるワークショップの実習を通じて、ワークショップリーダーやサポーターの能力を養う。

3. 知識面についての目標

自身が専攻する音楽ジャンルだけではなく、様々な分野の日本伝統音楽について理解し、正しい知識を持つ。また、日本伝統音楽との関連性を考慮しつつ、周辺アジアをはじめとして世界の民族音楽についての知見を広める。音楽を通じて日本文化に対する深い造詣と国際的な視野を持つことを目指す。

4. 演奏家としての目標

確かな演奏技術を基に伝統を踏まえた上で、豊かな音楽性と真の個性を確立し、国内外において活躍できる演奏家を目指す。

II

コースが推薦する 基礎科目名

- ①「ソルフェージュ」
- ②「邦楽サウンド論」
- ③「邦楽ワークショップ2～4」
- ④「日本伝統芸能研究1～4」
- ⑤「日本音楽史」
- ⑥「東洋音楽史」
- ⑦「日本の伝統芸能と音楽」
- ⑧「古典邦楽作品研究」
- ⑨「現代邦楽作品研究」

III

IIの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

日本の伝統音楽は元来口伝を基本とし、楽譜は存在してもあくまでも目安に過ぎなかった。しかし、現代における情報化社会では多様性と即応性が求められ、現代作品においては五線譜で書かれているのが通常である。そのため、これからの邦楽奏者は各楽器の奏法譜とともに五線譜による正確な演奏能力が要求され、「ソルフェージュ」はその基礎となる。また、本コースにおける共通認識を構築する基幹授業として「邦楽サウンド論」が存在する。

近年、小中学校の音楽授業における和楽器導入を切っ掛けに新しい邦楽の教授法、教育法が望まれている。「邦楽ワークショップ2～4」は新時代の邦楽における音楽教育法のあり方を研究する授業になる。

自国の文化を理解することは国際的活動の上で必要条件であり、国内外で活躍する邦楽演奏家を目指す者にとっては尚更である。上記の講座はその目的に添う。

コース

ロック&ポップスコース

I コースの 到達目標

現代の商業音楽では、1アーティストを世に送り出すために、多くのプロフェッショナルが関わります。ソロ、バンドを問わず、レコーディング、コンサート、宣伝、販売、マネージメント等、アーティスト一人だけの力ではカバーしきれない部分をチームワークで補いながら、「最高」を目指すのです。

この時大切なのは、チーム全員が同じ「最高」をイメージすること。それぞれが勝手な方向性・レベルで考えていては、よい結果は得られません。イメージを共有し、方向を定めることこそがプロデュースにおいて最も重要な要素なのです。

本コースでは、ミュージシャンに必要な不可欠な「個性」を1対1のレッスンで育てながら、バンドアンサンブルでチームプレイを経験し、さらにレコーディングやライブを通じて「最高」の結果を得るためのプロデュース・ワークを学びます。

II コースが推薦する 基礎科目名

- ①「バンド・ワークショップ1・2」(1・2年次)
「アドバンスト・バンド・ワークショップ1・2」(3・4年次)
- ②「レコーディング・セッション1・2」(1・2年次)
「アドバンスト・レコーディング・セッション1・2」(3・4年次)
- ③「R&P・ベーシックス」
- ④「R&P・セオリー」
- ⑤「R&P・ヒストリー」
- ⑥「ソルフェージュ I ～」

III IIの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

①「バンド・ワークショップ1・2」
「アドバンスト・バンド・ワークショップ1・2」
バンド活動のシミュレーションを行います。半期3回のレコーディング・セッション、半期末のライブを目標に制作・練習を行う、このコースの中心授業です。半期毎にバンドは再編成。ソロ・アーティストを目指すミュージシャンも、様々な個性、価値観に出会うことができます。

②「レコーディング・セッション1・2」
「アドバンスト・レコーディング・セッション1・2」
1年次からプロレベルのレコーディング・スタジオ・ワークを経験します。「いい音」を聞くことで「いい耳」を育てます。

③「R&P・ベーシックス」
ロック・ポップスを目指すミュージシャンに最低限必要な知識を習得します。音楽家の共通言語である譜面の読み方書き方、機材・コンピューターの知識、音楽業界の構造、レコーディング・マナー、ステージパフォーマンス等、多岐に亘ります。

④「R&P・セオリー」
ロック・ポップスの世界ではコードが作編曲やアンサンブルのキーワードとなります。コードがどのようなセオリーでできているのか、という初歩的な知識から始まり、コードをどのように繋げたらよい曲、アレンジができるのかを、実在のヒット曲を例にとり解説します。

⑤「R&P・ヒストリー」
ロックという言葉が音楽のジャンルを表す言葉として使われ始めてから約半世紀が経ちました。常に「新しいこと」「人とは違う何か」を追求し、チャレンジしてきた先人達のアイデアの中には、今も「使える」もの、あなたの感性を刺激するものがきっとあります。勉強というより、宝探しの講座です。

⑥「ソルフェージュ I ～」
初めて聞いたメロディーをすぐに口ずさめますか？
流れてくるリズムに合わせて自然に体は動きますか？
この授業は、ミュージシャンの命とも言える「耳」を鍛えます。

コース

声楽コース

Ⅰ コースの 到達目標

声楽は身体を楽器として共鳴させる事により、感情や自然の美しさ等を表現することが出来るすべての音楽の源である。本コースでは人の心に訴え聴く人に感動を与える舞台表現者を目指す為に、詩に関する知識・能力を養い、音楽表現・身体表現に必要な専門的講座を数多く用意し、演奏家、指導者、他それぞれの進路に合わせ科目を選択し研究する。発声のテクニックを向上させ、知識や教養を身に付け、感性を磨き、さまざまな経験を通して豊かな表現力を身に付ける事で、幅広いジャンルに対応出来る声の技術を研鑽し成長することを目指す。

Ⅱ コースが推薦する 基礎科目名

- ①「声楽基礎演習Ⅰ-1・Ⅰ-2」「声楽基礎演習Ⅱ-1・Ⅱ-2」
- ②「ヴォーカル基礎演習」「ヴォイストレーニング・ラボ」「ポップスハーモニー実習」「アコースティック・ミュージカルスタディ」
- ③「歌曲講座1～5」
- ④「専門合唱」
- ⑤「オラトリオ実習」
- ⑥「室内オペラスタディ」
- ⑦「オペラ実習」
- ⑧「IPA音声学」
- ⑨「発声の為の解剖学」
- ⑩「合唱指導法」
- ⑪「音楽分析基礎講座」

Ⅲ Ⅱの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

- ①「声楽基礎演習Ⅰ-1・Ⅰ-2」「声楽基礎演習Ⅱ-1・Ⅱ-2」
声楽を学ぶ為の理論と実践の基礎を学ぶ。イタリア・ドイツ・フランス各国語のディクシオン、舞台表現者の身体の成り立ちと表現法としてのピラティス、ボディ・マッピング、アクティング、シアトリカル・リーディングなど、またリズムソルフェージュ、レパートリー声楽史、オペラ文化史などのそれぞれの分野専門の講師陣の指導を受けることにより、将来的どのような専門家として活躍していくか具体的なビジョンを持てる。
- ②「ヴォーカル基礎演習」「ヴォイストレーニング・ラボ」「ポップスハーモニー実習」「アコースティック・ミュージカルスタディ」
身体全体を楽器として響かせる声楽の発声法を基礎とし、ポップスやミュージカル、アカペラによるハーモニー等、幅広いジャンルに対応出来る声楽のスペシャリストとしての技術と表現力を磨くことができる。
- ③「歌曲講座1～5」
イタリア歌曲、ドイツ歌曲、日本歌曲、フランス歌曲、英米歌曲、スペイン歌曲の、各ディクシオンから作曲家や詩人の時代背景、楽曲分析などを考察し、その知識を実践に活かせる講座である。
- ④「専門合唱」
前期にはNHK全国学校音楽コンクール 小学校・中学校・高等学校の課題曲に取り組み、課題曲クリニックでのレクチャーと演奏を行う。後期では多彩な分野の合唱曲に取り組み事により、合唱に関する高い知識・能力を養い、指導に活かせる表現・演奏ができるようになる。
- ⑤「オラトリオ実習」
音楽史上重要な分野であるオラトリオを専門的に研究し、チェンバロやオルガン、古楽器、オーケストラなどとの共演により、宗教音楽の演奏技法を習得する。
- ⑥「室内オペラスタディ」
1年間1つのオペラ演目に関する台本・時代背景・音楽分析などの解釈を学び、舞台制作や上演に向けてのプロフェッショナルな演習とする。

コース

声楽コース

—Ⅲ—
Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

⑦「オペラ実習」

総合芸術であるオペラの重唱を1・2年生で養った基礎能力を基本に実践的に研究し、歌い・演じることが出来る。

⑧「IPA音声学」

イタリア語IPA(International Phonetic Alphabet)国際音声記号の習得により、正しい発語から生じる発音・発声の能力を養い、自ら演奏出来る様になる。

⑨「発声の為の解剖学」

声楽家としての発声の為の身体構造及び機能を学び、解剖学の観点から科学的に研究する。

⑩「合唱指導法」

合唱指揮者としての知識と指導法を研究する事により、合唱について指導者の立場から自分の言葉で説明する技能を磨くことが出来る。

⑪「音楽分析基礎講座」

楽曲を演奏する為には作品を分析する能力が必要であり、その為の大切な和声学への理解しやすい導入講座である。

※「声楽基礎演習」「ヴォーカル基礎演習」「歌曲講座」「オペラ実習」「オラトリオ実習」「専門合唱」は必ず履修するよう推薦する。

コース

ミュージカルコース

I コースの 到達目標

ミュージカルは、演劇と音楽が融合した総合舞台芸術の一つである。優れた舞台人になるためには、歌、ダンス、演技の基礎理論や専門知識を深く学び、それぞれの技術を向上させることが求められる。本コースでは、一人ひとりの可能性を最大限発揮するために、理論・実践の両面から指導を受け、多彩なコースを持つ洗足学園音楽大学ならではのオリジナル企画・公演を経験することができる。また、プロの舞台稽古の見学、レコーディング、TV・コンサート出演など、本物に触れる機会を通し、個人のレベルアップを目指している。英会話・ソルフェージュ・音楽理論等、ニューヨークやロンドンの教育システムを参考としたカリキュラムを通して、将来幅広く世界で通用するプロフェッショナルなミュージカル俳優となることを目標とする。

II コースが推薦する 基礎科目名

- ①「ヴォイストレーニング」
- ②「英会話講座」
- ③「ミュージカル概論」
- ④「舞台芸術概論」
- ⑤「演技論」
- ⑥「戯曲論」
- ⑦「基礎音楽理論」
- ⑧「ソルフェージュ」
- ⑨「舞台音楽論」
- ⑩「演出論」
- ⑪「ワークショップリーダー養成講座」
- ⑫「音楽分析基礎講座」

III IIの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標と の 関連性について

- ①「ヴォイストレーニング」専門のヴォイストレーナー、もしくはミュージカルに精通した声楽コースの講師による歌のレッスンにより、歌唱の基礎作り、また実践に向けての歌唱力を身につけていく。(個人レッスン40分)
- ②「英会話講座」将来、ミュージカルの本拠地(ニューヨーク・ロンドン)で活躍する事を想定した、実践的な英会話(台詞やステージマネージメント等で役立つ)の習得。また英詞での歌唱の際に役立つ様、発音等にも慣れていく。
- ③「ミュージカル概論」CD・DVD・ビデオを使用し、オペラ・オペレッタからミュージカルに至る歴史的背景や日本の現状を解説。アメリカ、イギリス、日本の代表的なミュージカル作品を取り上げ、総合芸術の一つとしてのミュージカルの位置づけを考える。
- ④「舞台芸術概論」日本における歌舞伎や能などの古典芸能、西洋のギリシャ悲劇からバレエ、オペラなどの舞台芸術全般に関する講義。
- ⑤「演技論」演技というものがどのように捉えられてきたのか考察するとともに実際に演技実習を行う。
- ⑥「戯曲論」テキストを読む力を徹底して鍛える。
- ⑦「基礎音楽理論」音楽理論の初歩を中心に基礎力を徹底的に身につける。また、ポピュラーやジャズ、民族音楽などを含む多くのジャンルの音楽に触れながら、楽曲の様式を学ぶ。
- ⑧「ソルフェージュ(MS専用)」楽譜を読むこと、書くこと、歌うこと、音楽の成り立ちを考えること等作品と演奏との関わりを追求し、音楽大学生として必要なソルフェージュ能力の習得。
- ⑨「舞台音楽論」ミュージカル音楽を中心に、その作曲技法やストーリーとの関連性について分析する。
- ⑩「演出論」舞台芸術における演出の仕事とは何かを、演技、美術、照明、音響、衣装、メイクなど各方面から明らかにするとともに、世界の名演出家の思考・業績を研究する。芸術面だけでなく、現場における演出家の実務面の役割についても講義する。
- ⑪「ワークショップリーダー養成講座」近年さまざまなジャンルでワークショップのニーズが高まっており、それに対応できるワークショップリーダーに必要なスキルやプログラムの作成・進行について学ぶ。
- ⑫「音楽分析基礎講座」楽曲を演奏するために必要な、作品に対する理解力・分析力を学ぶ。

コース

バレエコース

I コースの 到達目標

身体で音楽を奏でるバレエは、言葉を使わずに感情を表現し、音楽・美術・踊りが融合した総合芸術である。

プロフェッショナルなバレエダンサーになるためには、優れた芸術性、身体能力、個性、音楽性、テクニック、コントロール、コーディネーションなどが求められる。本コースでは、クラシック・バレエの正確なポジション、質の高い動きやテクニックを身に付け、コンテンポラリーなどさまざまなスタイルの踊りにも対応できるように指導していくと共に、音楽大学ならではの多彩な授業により、表現者、芸術家としての教養を学生が主体的に身につけることを大切にしている。

学生は、オーケストラの演奏でプロのバレエダンサーと共に公演に参加することで本物に触れ、舞台での表現を学び、それぞれのレベルアップを目指すことができる。また海外研修などで世界のバレエ教育に触れて視野を広め、将来幅広く世界で活躍できる舞踊家となることを目標にすることができる。

II コースが推薦する 基礎科目名

1. 専門選択科目(各コース)

- ① バレエ研究
- ② バレエ実習
- ③ 身体表現実習
- ④ ダンスパフォーマンス

2. 専門選択科目(全コース共通)

- ⑤ 音楽史
- ⑥ ソルフェージュ

3. 一般総合科目

- ⑦ 舞踊史
- ⑧ 解剖学
- ⑨ 動作学
- ⑩ 運動生理学
- ⑪ 栄養学

III IIの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

①② バレエは「目で見る音楽」とも言われる総合芸術であり、ダンサーの身体は楽器である。クラシック・バレエのクラスレッスンを行い、作品に触れることによって、芸術性、身体能力、個性、音楽性、テクニック、コントロール、コーディネーションなどを向上させることができる。

③ グローバルな視点で、幅広くバレエの技術を習得する。またコンテンポラリーダンスや、キャラクターダンスについて学び、多彩な表現ができるようになる。

④ ジャズダンスのあらゆるジャンル(ブロードウェイ、ジャイブ、リンディホップ、ブギなど)の基礎を深め、それぞれの個性にあった魅せ方と表現の可能性を模索し、身につける。

⑤ 日本と西洋の音楽を対象とし、その現代に至る大きな歴史の流れを理解し、バレエを志す者にとって不可欠な音楽史の基礎的理解力を養う。

⑥ バレエにおける音楽の理解を深めるために、楽譜を正しく理解して歌い、踊り、表現する力を育てる。バレエダンサーを目指す者にとっての基礎的なソルフェージュ能力を向上させ、楽譜を読むことで楽曲を分析し構成を感じとる力を付けることができる。

⑦ 舞踊史を概観するとともに、その歴史を音楽やオペラ、文学、美術などとの関連において理解できるようになる。

⑧⑨ 理にかなった体の動き方を習得するために、関節や筋肉など身体の機能について科学的に学ぶことができる。

⑩⑪ 怪我を予防し、ボディ・コンディションを整えるための基礎知識を身につけることができるようになる。

コース

声優アニメソングコース

I

コースの
到達目標

声優アニメソングコースでは、日本国内にとどまらず海外からも熱い注目を集めているアニメを中心とした文化芸術において、「声優」「アニメソング歌手」としてプロフェッショナルな世界で活躍する「声のスペシャリスト」を養成することを目標にしている。本コースでは、音楽大学が長年培ってきた「声」の魅力を高める多彩なカリキュラムを活かし、「演技」「歌唱」「ナレーション」に関する専門知識を深く学んだ上で、身につけた技術を数多くの本番で発表することによって、実践を通じて専門を磨きます。

II

コースが推薦する
基礎科目名

- ①「ヴォイスアーティスト技法研究」
- ②「ASアンサンブル実習」
- ③「ASスタジオワーク」
- ④「ヴォイスアーティスト基礎演習」
- ⑤「ナレーション基礎演習」
- ⑥「音声表現実習」⑦「ヴォイスアーティスト演習」
- ⑧「演技論」⑨「演出論」
- ⑩「アニメソング総合演習」
- ⑪「ヴォイスアンサンブル」
- ⑫「ASダンス演習」⑬「シアターダンス」
- ⑭「コンテンツ制作」
- ⑮「音楽理論入門」⑯「音楽分析基礎講座」⑰「ソルフェージュ」

III

IIの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

- ①「ヴォイスアーティスト技法研究」ASコースのカリキュラムは、「演技」「歌唱」「ナレーション」の三つの領域から成り立っている。三つの領域の中から、学生は自分の志向にあった領域を選び、「ヴォイスアーティスト技法研究」で、音楽大学ならではの個別指導の視点を取り入れた、綿密な「レッスン」を受けることができる。
- ②「ASアンサンブル実習」学年別に「横割」でテーマを設定する「ASアンサンブル実習」では、多様な指向を持つ学生が、同期で一丸となって、演奏会や公演を制作する体験を共有する。
- ③「ASスタジオワーク」録音スタジオでの現場に対応するための、基本的なノウハウを身に着ける。
- ④「ヴォイスアーティスト基礎演習」発声発音の基礎を学ぶ。
- ⑤「ナレーション基礎演習」ナレーションの基礎を学ぶ。
- ⑥「音声表現実習」/⑦「ヴォイスアーティスト演習」2年次から4年次にかけての「ゼミ」を設定している。多様な学習分野の中から、学生ひとりひとりが自分の志向に合わせて、毎年「ゼミ」を二つまで選択して履修することができる。この必修科目では、学年の垣根を越えた「縦割」のクラス編成を導入することによって、全コース的なコミュニケーションの促進が図られる。アニメソングのライヴや、朗読劇、ナレーション、アニメを題材としたミュージカルや舞台など、学生のニーズにあわせて、バラエティ豊かで斬新な内容の「ゼミ」を整備している。
- ⑧「演技論」/⑨「演出論」演技に関する歴史や理論をアカデミックな視点で学ぶ。
- ⑩「アニメソング総合演習」アニメの物語や役柄を、様々な角度から解釈しながら、歌唱能力を高めることを目指す。
- ⑪「ヴォイスアンサンブル」音楽のジャンルの枠に捕われず、コーラスを中心とする声のアンサンブルを学ぶことができる。
- ⑫「ASダンス演習」/⑬「シアターダンス」アーティストとして要求されるパフォーマンスを学ぶ。
- ⑭「コンテンツ制作」クリエイターとして必要最低限のコンテンツ制作技術を学ぶ。
- ⑮「音楽理論入門」/⑯「音楽分析基礎講座」/⑰「ソルフェージュ」ASコースの学生の特性にあわせて拡充し、普遍的な音楽の理論を学習する。

Ⅰ コースの 到達目標

ダンスは言語を超えたコミュニケーションであり、身体で音楽を表現する総合芸術である。本コースでは、様々なジャンルのダンスを学ぶことで、プロフェッショナルなダンサーに求められる技術と、個性豊かな表現力を身に付ける。学生創作公演においては、振付からパフォーマンスへとつなげるダンスの構成を体験するとともに、公演の企画制作を行う。多彩な実技と講義の授業を通して知識と教養を深め、数多くの本番を経験することで、世界で幅広く活躍できるダンサーを育成することを目標とする。

Ⅱ コースが推薦する 基礎科目名

1. 必修科目
 - ① 舞踊研究
2. 専門選択科目(各コース)
 - ② 舞踊創作研究
 - ③ ダンスパフォーマンス
 - ④ 身体表現実習
 - ⑤ シアターダンス
 - ⑥ バレエ実習
 - ⑦ コンテンツ制作
3. 専門選択科目(全コース共通)
 - ⑧ 音楽史
4. 一般総合科目
 - ⑨ 舞踊史1／舞踊史2
 - ⑩ 解剖学／動作学
 - ⑪ 運動生理学
 - ⑫ 栄養学

Ⅲ Ⅱの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

- ① 専門として選択したジャンルのダンスを追求し、学期末の公演に向けた練習を通じて、専門分野で必要とされるテクニックを深め、アーティストとしての表現力や音楽性を磨く。
- ② 学生創作公演に向けて、振付の創作過程を学ぶ。
- ③④⑤ 様々なジャンルのダンスを幅広く学ぶ事で、ダンサーとして豊かな表現力を身に付け、多様なスキルを修得する。
- ⑥ あらゆるダンスの基本となる、クラシックバレエの基礎を学ぶ。
- ⑦ パソコンで楽曲や映像を編集するスキルを学び、自分のスタイルに合った音源や動画を制作する。
- ⑧ 日本と西洋の音楽を対象とし、その現代に至る大きな歴史の流れを理解し、ダンスを志す者にとって不可欠な音楽史の基礎的理解力を養う。
- ⑨ 舞踊史を概観するとともに、その歴史を音楽やオペラ、文学、美術などとの関連において理解する。
- ⑩ 理にかなった体の動き方を習得するために、関節や筋肉など身体の機能について科学的に学ぶ。
- ⑪⑫ 怪我を予防し、ボディ・コンディションを整えるための基礎知識を身に付ける。

I コースの 到達目標

本コースは、専攻楽器、音楽ジャンルが多岐にわたり、到達目標も専攻によって違いがありますが、コース全体の目標として次の3つがあります。

1. 各自の専攻する楽器、音楽を探求し、演奏技術および表現力の向上を図り、伝統的なスタイルによる演奏が確実にできること。
2. 新しい表現方法も探り、自身で演奏と簡単な作曲の両方が行えるようになること。
3. 世界のさまざまな音楽文化を理解し、共演者と協調しあいながらアンサンブルができる。

本コースの特徴として、演奏家としての学習だけに留まらず、クラシック系の作編曲や、より活動の幅を広げるための録音や各種メディアを活用した創作の勉強も可能です。録音系の学習では、マイクを通した音と「生」の音との違いを知覚できるようになります。また、作編曲系の学習を通して、さまざまな楽器やアンサンブルに対応できる能力が身につきます。

演奏家として新たな音楽のあり方を模索し、自分の理想の音と音楽を見出せるようになります。

豊かな感受性を持ち、どのような場にもふさわしい音楽を提供できる音楽家になっていきましょう。

II コースが推薦する 基礎科目名

- ①ワールドミュージック概論1～4
- ②ワールドミュージック演奏論1～4
- ③音楽表現演習1～4
- ④和声学 I ～、ハーモニー I、II
- ⑤DAW演習 I、Pro Tools入門
- ⑥ワールドミュージック応用研究 1～2
- ⑦諸民族の音楽
- ⑧スタジオレコーディング演習、サウンドエンジニアリング基礎理論、
- ⑨即興演奏講座

III IIの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

①ワールドミュージック概論

フラメンコ、南米、アパラチアなどの音楽の旋法やリズムの基礎理論を知識と感覚の両方から習得していきます。それぞれの音楽のスタイルでの簡単な作曲、即興へのアプローチとなります。

②ワールドミュージック演奏論

いわゆる「クラシック音楽」とよばれる西洋芸術音楽をはじめ、様々な音楽の基礎理論を学習しながら、聴感覚やリズム感を訓練します。また、さまざまな演奏スタイル、音楽解釈を学び、ソロやアンサンブルにおいて必要とされるスキルを身につけていきます。

③音楽表現演習 1～4

初見視奏、読譜の基礎能力を高め音による表現力を向上させます。書かれている音を弾くだけでなく「自分はこの曲で何を表現するのか」

「聴衆へ伝わる表現にするためにはどういう奏法を用いるのか」を学んでいきます。

コース

ワールドミュージックコース

——Ⅲ——
Ⅱの基礎科目の
推薦理由
と
コースの達成目
標との
関連性につ
いて

④和声学Ⅰ～、ハーモニーⅠ、Ⅱ

音楽を専門とするものにとって、必要不可欠な和音に関する学問。様々な和音の扱い方を習得することで、自身の作曲、編曲、即興の基本となっていく。同時に、楽曲の演奏において作曲家の意図することへの理解の一助にもなります。

⑤DAW演習Ⅰ、Pro Tools入門

シンセサイザーの原理、オーディオの知識や音楽編集ソフトの取り扱いの基礎を学びます。演奏上の新しい表現方法の模索に活用できるようになります。

⑥ワールドミュージック応用研究1～2

ワールドミュージック概論、演奏論で学んださまざまなジャンルの音楽の要素を応用し、各自の専門楽器のための作品を作り、演奏を行います。これはコースの到達目標の2に掲げている、新しい表現方法と自身での作曲、演奏のトータルな音楽表現に直結します。

⑦諸民族の音楽

世界の多様な楽器、音楽文化そして音楽と人間の関わりについて学びます。音楽のみならず社会的な価値観の違いなども考えることになり、コースの到達目標の3に掲げた「豊かな感性をもち、どのような場にもふさわしい音楽を提供する音楽家」への第一歩となります。

⑧スタジオレコーディング演習、サウンエンジニアリング基礎理論

録音系の授業ではマイキングやエフェクターの基礎知識を学び、自由なサウンドの構築方法を会得します。自らの楽器を通してセルフプロデュースができるようになります。

⑨即興演奏講座

自由な即興演奏を学びます。自分のやりたい音楽を再確認するとともに、共演者との音楽的コミュニケーションをとる能力が向上します。

コース

音楽教育コース

I コースの 到達目標

音楽教育コースは、「音楽を愛好する人と心を育てる」ことについて学ぶコースです。将来、学校の教員、吹奏楽や合唱のインストラクター、特別支援の指導員、生涯学習や音楽教室の講師など、各分野の指導者として活躍できるようになるために、またはその他の音楽に関わる職業、あるいは音楽教育の学びが生かせる職種で社会人として活躍できるように、4年間かけて研鑽を積みまします。その研鑽の対象として、音楽教育コースのカリキュラムは、音楽教育に関する「専門研究」、声楽やピアノ、言語表現などの「実技と実習」、作曲や編曲などの「創作表現」、和声学やソルフェージュなどの「基礎能力」、音楽史などの「専門教養」といった5つを柱としています。

これらの音楽に関する指導と実践、ならびに演奏会や特別活動の企画と運営についての知識と能力を体得し、幅広い教養を涵養して、音楽を世に広めることに社会貢献できる力を着実に身に付けることがコースの到達目標です。

II コースが推薦する 基礎科目名

1. 専門選択科目（各コース）

- ①音楽教育研究
- ②ピアノ実習
- ③声楽実習
- ④言語表現演習
- ⑤作曲法・編曲法

2. 専門選択科目（全コース共通）

- ⑥和声学 I
- ⑦音楽史

III IIの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標と の 関連性について

①「音楽教育研究」はコースの中核をなす授業です。音楽に関する基礎的な素養を身に付け、実践的な演習も加えていながら、音楽の指導に関わる技能と知識を専門的に研究していきます。その最終目標は卒業論文の執筆です。カリキュラムの5つの柱においては「専門研究」の項目に類する科目となります。

音楽教育の分野で演奏の実践は不可欠です。特に指導の現場ではピアノを弾きながら歌って教えることを求められることがしばしばです。

②「ピアノ実習」、③「声楽実習」では、個人レッスンを通じてピアノと声楽の基礎演奏力を養います。④「言語表現演習」では、「書く力」「話す力」を徹底的にトレーニングし、プレゼンテーションとコミュニケーションのスキルを養います。以上②～④は、カリキュラムの5つの柱において「実技と実習」の項目に類する科目です。

⑤「作曲法・編曲法」は、楽曲分析や諸形式による作曲・編曲を通して様々な音楽語法と音楽表現の理解を深め、あわせて合唱や合奏の編作のノウハウも学びます。カリキュラムの5つの柱においては、「創作表現」に類する科目です。

⑥「和声学」は、西洋音楽の伝統的な音楽書法を学ぶための必須の理論と実習です。カリキュラムの5つの柱においては「基礎能力」に類する科目です。

⑦「音楽史」は、カリキュラムの5つの柱における「専門教養」の項目での根幹となる科目で、教職科目の1つでもあります。学校教育でとりあげられる西洋音楽、日本音楽、諸民族音楽、種々のポピュラー音楽の歴史を学ぶオンデマンド授業です。

コース

音楽環境創造コース

Ⅰ コースの 到達目標

本コースは「音響」「照明」「制作」「配信」を主体とする、新世代の制作スタッフ育成を目指します。主科1として上記4つの中からひとつ選択し、それを専門分野としてグループレッスンの形態で学んでいきます。また、自分の専門を学びながらも、主科2として、上記分野のひとつを平行して学習することも可能であり、さらに他コースのレッスンに置き換えることも可能です。

一方、コース専門選択授業においては、各分野を横断的に学習できるようになっているため、4年間を通じた学習により、イベントプロデューサーとしての能力を身につけることも可能です。

1年次は、仕事の流れや専門知識、ベーシックな技術を習得します。2年次には、標準的なシステムの運用と柔軟な対応力を高めていきます。3年次には、より高度なシステムの活用を目指します。4年次には、多様な場面で求められる”表現”を追求できるようになるでしょう。そのためには、音楽言語によるコミュニケーション、他コースとの協同など、専門技術以外の要素も重要です。これらの要素をバランス良く学習して欲しいと思います。

Ⅱ コースが推薦する 基礎科目名

- ①「公演実習」
- ②「音楽環境創造研究」
- ③「コンテンツ制作1」
- ④「舞台制作研究」
- ⑤「舞台音響研究」
- ⑥「舞台照明研究」
- ⑦「舞台配信研究」
- ⑧「応用合奏実習 / プロフェッショナル ワーク研究」
- ⑨「音楽理論入門」「ソルフェージュ」
- ⑩「フィールドインターンシップ」

Ⅲ Ⅱの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

①「公演実習」と②「音楽環境創造研究」は、コースの中核となる実習です。各分野の専門技術を学び、公演実習を通じてその技術の定着を図ります。また、実践の中でしか得ること出来ないテクニックやコミュニケーション方を体得します。

③「コンテンツ制作1」では、会場のシミュレーション、照明、音響のプランニングに必要なCADソフトウェア、“Vectorworks”を学びます。

④「舞台制作研究」では舞台に関する必要な基礎知識を習得します。すべて学生の受講を勧めます。

⑤「舞台音響研究」⑥「舞台照明研究」⑦「舞台配信研究」は、音や照明、配信を取り扱う上で必ず知っておくべき基礎知識を学びます。

⑧「応用合奏実習 / プロフェッショナル ワーク研究」では、一線で活躍する学内外の専門家の講座を受講します。

⑨「音楽理論入門」「ソルフェージュ」は、音楽の構成を把握するための基礎ですので、専門技術を活かすための重要な能力になります。将来信頼されるスタッフになるためにも是非履修してください。

⑩「フィールドインターンシップ」は、予め設定された学外のイベント、インターンシップに参加することにより単位が付与されます。実際の現場を体験することにより、将来を具体的にイメージすることができでしょう。

コース

メディアアーツコース

Ⅰ コースの 到達目標

近年、撮影機材や編集ソフトウェアの進化により、映像制作は身近なものになってきています。とはいえ、映像制作のプロフェッショナルは単に撮影して編集することだけにはとどまらず、さまざまな映像理論やノウハウを学ぶ必要があります。

本コースは撮影や編集を基本に学びながらも、映像制作に必要な事柄を学ぶことができます。デザインやアニメーション、あるいはシナリオ制作についても理解し、映像ディレクターに求められる幅広い知識と技術を身につけることが到達目標です。

Ⅱ コースが推薦する 基礎科目名

- ①「映像制作論Ⅰ～Ⅱ」
- ②「音響制作論Ⅰ～Ⅱ」
- ③「メディア企画研究Ⅰ～Ⅳ」
- ④「メディアデザイン研究Ⅰ～Ⅳ」
- ⑤「アニメーション研究Ⅰ～Ⅳ」
- ⑥「WEB制作研究Ⅰ～Ⅱ」
- ⑦「応用演奏会収録」

Ⅲ Ⅱの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

①「映像制作論」により映像制作について論理的なアプローチができるように様々な理論を学びます。

②「音響制作論」により映像に対する音の役割を理解し、適切に処理できるよう技術を身につけます。

③「メディア企画研究」によりシナリオ制作を学び、映像作品のもととなるストーリーを構築できる技術を身につけます。

④「メディアデザイン研究」によりデザインを学び、配置や配色のセンスを高めます。

⑤「アニメーション研究」により、映像に求められるアニメーションの制作について学びます。

⑥「WEB制作研究」により、自身の作品をWEBを通じて世に送り出す技術を身につけます。

⑦「応用演奏会収録」に参加することにより、①～⑥の授業で学んだテクニックを実際の現場で活用し、技術を高めることが出来ます。

なお、楽譜を読む映像クリエイターを目指す場合は、「ソルフェージュ」などの音楽の基礎科目も履修すると良いでしょう。